

## 依存症の治療目標

### —新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドラインから—

医療法人耕仁会 札幌太田病院  
精神科 中村 俊介

物質使用、特にアルコールについては、アルコールが合法の嗜好品であるという特性から、飲酒に伴うリスクの知識が正しく普及されず、飲酒をしていれば、誰でも使用障害・依存症になる可能性があること、飲酒量のコントロールができなくなる疾患であるということが理解されず、問題が生じては止められないのは本人の意志が弱いためである、という誤解や偏見が存在しています。

この誤解や偏見が、本人やそのご家族に、アルコール使用障害・依存症であることを否認させるとともに、医療や支援などの場でも、治療、回復、社会復帰の障壁となっています。

正しい知識を持ち、正しい手法の元で治療に取り組めば回復可能な疾患です。そして他の疾患と同様に早期発見、早期治療開始が重要です。2018 年に診療ガイドラインが新しくなりましたが、最も安全で最も安定的な治療目標が「断酒」であることは現在も変わりません。一方で、比較的軽症の方や明確な合併症を有しない方に対する早期介入の観点から、まずは「飲酒量低減」を目指すというケースも出てきました。

いずれにせよ治療、回復のゴールは「節酒」・「断酒」という手法によらず、その人や周りの方々の本来の幸せな生活を取り戻すところにあります。医療や自助グループとつながってみて、どんな良いことがあったか、どんな変化が身の回りに生じたか、日々の診察の場ではそのことに重点を置いてお話をうかがっています。

実際に医療につながったのは、治療を必要とする方の 1 割にも満たない、という報告もあります。しかし、ふと何かの拍子に「変えてみようかな」と思うこともあるものです。本日の機会がその一助になれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。